

■セミナー「第2回パーキンソン病の症例検討会」



京のNPOと府相談センターが症例検討会

難病(特定疾患)の一つで患者数が多いパーキンソン病について、NPO法人パーキンソン病支援センター(八幡市)と京都府難病相談・支援センター(京都市右京区)が共催で、在宅ケア症例検討会を始めた。介護支援専門員(ケアマネジャー)を対象に、症状への理解を深めてもらうため、今後も継続していく予定だ。(目下田貴政)

訪問看護活用など助言

パーキンソン病は安静時のふるえ(振戦)、関節のこわばり、動作緩慢、姿勢反射障害などの症状が出る。60歳前後の発症が多く、患者は人口10万人あたり100〜150人。京都府の特定疾患医療受給者証の所持者数を見ると、パーキンソン病関連疾患は3183人で、潰瘍性大腸炎に次いで2番目に多い(今年3月末現在)。

今後在宅ケアのケースが増えることを見越して、症例検討会は今年2月に初開催、2回目は7

月中旬に下京区のと・まち交流館京都で開催され、18人が参加した。「妻の介護をしている夫に病気の知識がなく苦労した」「動きが緩慢な妻に対し、夫が怠け者と罵声を浴びせるケースがあった」など、参加者が対応に困った事例を報告した。医師や看護師を交えて、対応方法を話し合った。

このほか、体が勝手に動く(スキネシア(不随意運動))が服薬後に起こりやすく、汗が多く出る▽食べ物のおいげが分かる

出し合って、分かりやすく説明してもらえた」といった感想が聞かれた。府難病相談・支援センター1長の水田英二・宇多野病院神経内科医長は「多職種で討論する場合は意外に少なく、自分の経験を通じた疑問をぶつけ合う会にしたい。患者が家でどのような暮らしをしているのか知る機会にもなる」と話した。

12月8日には専門医の講演会を開き、3回目の症例検討会は来年4月以降に予定する。

パーキンソン病支援センターの寺松由美子理事長は「母親を介護した経験から、介護や医療の専門家の力は大きいと感じた。参加したそれぞれが意見を述べて、力を付けてほしい」と期待している。

パーキンソン病 在宅ケア 対応法探る



「病気がこの先どうなっていくのか、在宅療養の伴走者として訪問看護を活用してほしい」と述べた。

参加者からは「今は起きていない症状に対する予測ができた」「症例を

パーキンソン病の特性を学んだ症例検討会(京都市下京区)と、まち交流館京都